

【WCC 北京大会 1日、2日目 個人・団体総合レポート】

2026年6月19日から21日まで、中国・北京においてワールドチャレンジカップ北京大会が開催された。本大会は、ワールドチャレンジカップとして初めて中国で開催された大会である。

初開催ということもあり、ワールドカップシリーズや他のワールドチャレンジカップと比較すると参加国数・参加選手数はやや少なかったものの、新体操強豪国であるロシア、ベラルーシをはじめ、東欧・中央アジア諸国も多数参加しており、中国開催ならではの参加国構成が見られる大会となった。

個人競技には19か国33名が出場し、日本からは鈴木菜巴選手、喜田未来乃選手が出場した。団体競技には11か国が参加し、日本からはフェアリージャパンが出場した。

本大会は、8月に開催される世界選手権に向けた重要な国際大会の一つであり、各選手・チームにとって現状の課題と成果を確認する貴重な機会となった。

【個人】

■鈴木菜巴

個人総合 9位 100.650

《リボン》

得点：25.800 (DB7.1/DA3.6/A7.55/E7.55)

最初の種目はリボン。アジア選手権では、その時点での完成度を最優先した構成であったが、今回は短期間ながら、本来目指していた技を記憶から呼び戻し、難度の向上や順序の入れ替えなど、構成の抜本的な見直しを行って臨んだ。

本番では、直前まで入念に確認した冒頭二つのブーメランを冷静に処理した。前回リスクで苦戦した経験を活かし、投げ受けを丁寧に行うとともに、前回回避したDAも確実に成功させた。最後まで高い集中力を維持し、現時点で発揮できるパフォーマンスを出し切ることができた。

一方で、リボンの図形の描き方が不明確であったため、DB（身体難度）およびDAで加点を取りこぼした点が課題として残った。この部分については、次戦に向けた最優先の改善事項として取り組んでいく。

《クラブ》

得点：26.250 (DB7.8/DA3.6/A7.45/E7.40)

リボン終了からのインターバルが短い中、自分をコントロールし2種目目のクラブに臨んだ。クラブにおいては、技の羅列になっていた箇所を修正し、演技全体のつながりと流れを意識した構成に見直して本番を迎えた。

前半の最初のリスクにおいて、クラブの軌道がわずかに逸れ、惜しくも 0.5 の落下ミスとなった。しかし、続く足受けのリスクでは執念を見せ、最後まで手具を離さずに処理した。この粘りは得点にも反映された。後半のジャンプもしっかりと踏ん張り、ミスを最小限に抑えて演技をまとめ上げた。

北京出発前夜、WG より世界選手権出場に関する正式通知が届いた。突然の知らせであり、喜びや安堵に浸る間もなく大会を迎えることとなったが、本人はその機会を自身の成長だけでなく、日本新体操の発展につなげたいという強い責任感を持って臨んでいた。

今大会では、構成変更後の演技を国際舞台で実践し、一定の成果を得ることができた。世界選手権に向けた新たなスタートとして、確かな第一歩を踏み出した大会であった。

《ボール》

得点：24.150 (DB6.0/DA3.1/A7.60/E7.45)

直前練習ではやや落ち着きのなさも見られたが、その要因は明確に把握できていたため、本番への不安要素とすることなく冷静にフロアへと臨んだ。

本番では最後まで集中力を切らすことなく、落下のない演技をまとめることができた。しかし、技術的な精度という点では課題も見られた。リスクにおいては空中下での回転不足や前転シリーズがダブルでの実施に留まったこと、また DA においても手具の投げの高さや回転数の不足、転がしにおける 2 部位の不足などが見られた。

これらの精度をさらに高め、自信を持って実施できるようになれば、今後さらなる得点向上が期待できる内容であった。

《フープ》

得点：24.450 (DB6.2/DA3.3/A7.50/E7.45)

北京入国前から体調が万全ではない状況の中、最終種目は体力的にも厳しい局面での演技となった。しかし、前回大会からの課題であった「最後までやり切ること」を強い意志で遂行し、大きく演技を崩すことなくまとめ切った点は評価できる。

課題としては、ボールで見られた内容と共通する部分が多いが、加えて身体難度と手具操作のタイミングをより正確に一致させることが求められる。今後は一つひとつの技術の精度向上とともに、演技全体の完成度を高めていく必要がある。

■喜田未来乃

個人総合 14 位 98.350

《フープ》

得点：25.550 (DB7.2/DA3.4/A7.5/E7.45)

今大会最初の種目となったフープでは、大きなミスなく演技をまとめ、4種目の中では最も安定した内容となった。演技序盤は落ち着いて演技を進めることができたものの、細かな精度の不足が得点に影響する内容となった。

1つ目のリスクでは、回転しながらの受けによる加点を獲得することができなかった。また、ドゥバンでは右足のポジションが途中で下がってしまい、身体難度の質に課題が見られた。さらに、アチチュードの DA ではタイミングがずれたことで、本来意図した実施とは異なり、ひねりの後にバランスを行う形となった。

演技終盤のリスクでは、投げが真上に上がったことで回転数が不足し、リスクが不成立となった。大きなミスには至らなかったものの、難度や投げ技の精度向上が今後の課題として残った。

《ボール》

得点：24.950 (DB6.9/DA3.6/A7.45/E7.0)

ボールでは一部ミスがあったものの、身体難度および DA では一定の価値を積み重ねることができた。演技全体としては、自身の持つ力を発揮できた部分と課題の両方が見られる内容となった。

3つ目のリスクでは投げの方向が前方へずれたことで受けの判断が遅れ、落下につながった。その後、本来予定していた転がしの DA を1つ実施することができなかった。

一つひとつの技術の精度向上とともに、投げのコントロールや状況判断を高めることが今後の課題である。

《クラブ》

得点：24.200 (DB7.5/DA3.0/A7.35/E6.35)

クラブでは高い難度に挑戦した一方で、複数のミスが重なり、本来の力を十分に発揮することができなかった。

ラファエリターンでは踵が下りてしまい、身体難度の完成度に課題が見られた。また、2つ目のリスク後の2本投げの DA およびステップ後の2本投げの DA において落下が発生し、大きな失点につながった。

演技終盤のリスクでは、お尻周りの回転が2回転となり、予定していた回転数に達することができなかったほか、手以外受けも実施できなかった。

手具操作の精度向上とともに、難度と手具操作を安定して実施できる力を高めていく必要がある。

《リボン》

得点：23.650 (DB6.2/DA3.3/A7.3/E6.9/P0.05)

リボンでは、演技冒頭と終盤のリスクに課題が見られた。

冒頭のリスクではリボンを十分に踏むことができず、投げにつなげることができなかつたため、リスクを成立させることができなかつた。

また、演技終盤のリスク後にはリボン操作が不十分となり、リボンが身体に絡まったことでDAを1つ実施することができなかつた。

一方で、大きく演技を中断することなく最後まで演技を継続できたことは今後につながる経験となった。リボン特有の操作精度やリスク実施時の確実性を高めることが今後の課題である。

今大会では、アジア選手権後に見直した新たな構成に挑戦しながら4種目を演技した。一定の成果が見られた部分もあった一方で、世界で戦うために必要な技術の精度や演技の完成度という点では多くの課題が明確となる大会であった。

アジア選手権後に演技内容を見直し、一部構成を変更して今大会に臨んだが、変更した部分の踊り込みや完成度が十分ではなかつたと感じている。また、今回発生したミスは新たに生じたものではなく、日頃の練習やこれまでの試合でも見られていた課題が本番で表面化したものであった。

そのため、技術面だけでなく、日々の練習に対する向き合い方についても改めて見直す必要があると感じている。練習中に起きた小さなミスや違和感を見過ごさず、一つひとつ確実に修正しながら積み重ねていくことが、試合での安定した演技につながることを改めて実感した。

今回見つけた課題を明確に整理し、よりクリアな身体難度の実施、技術の精度向上、そして演技全体の完成度向上を目指して今後の練習に取り組んでいきたい。世界選手権まで残された期間は限られているが、一日一日の練習を大切に積み重ねながら、安定した演技と高い実施精度を発揮できる選手を目指して成長していきたい。課題が明確となった今大会を今後の強化につなげることで、更なる得点向上と競技力向上が期待される。

【団体】

団体総合 6位 45.700

《総合1日目：ボール5》

得点：26.300 (DB5.9/DA6.6/A7.2/E6.6)

日本は、地元中国、強豪ロシアに続き、Bグループ3番目に出場した。地元開催ならではの大きな声援に包まれた直後、静まり返る会場へ入場するという独特の雰囲気の中での演技となった。

会場となった国家体育場は、2008年北京オリンピックの開催会場であり、上下左右ともに広さがあることから、選手たちは公式練習の段階から空間把握や投げの距離感への対応に苦戦する様子が見られた。また、ボール種目は緊張によって動きが硬くなりやすい傾向があり、

本日の演技においても、特に前半は動きの硬さや身体の緩さが目立つ内容となった。

演技では、冒頭2つのCRおよび前転シリーズのCRにおいて、3名中1名が受けの価値を実施できなかった。また、2つ目の複数投げでは、視野外で投げ打つ側のボールの飛距離が不足したことでノーカウントとなった。さらに、3つ目の交換においても1名が受けの価値を取りきれなかった。

身体難度においては、全体を通して実施減点を伴う内容となった。落下ミスはなかったものの、両手受けや四肢の緩み、投げ受け時の移動などが減点要因となっており、今後は実施減点の削減に向けて、身体難度全般の精度向上とあわせて改善を図っていく必要がある。

一方で、春先から課題としてきた後半までの集中力維持については成果が見られ、演技全体を通して落下ミスなくまとめることができた点は評価できる。

今大会期間中も一つひとつの経験から学びを得ながら、さらなる成長につなげていきたい。技の実施だけでなく、芸術性や実施の質にもこだわりを持ち、一つの作品として最後まで表現し切れるよう取り組んでいく。

出場メンバー

田口久乃、西本愛実、花村夏実、田中友菜、眞鍋凜

【団体】

《総合2日目：フープ・クラブ》

得点：19.400（DB5.2／DA5.1／A6.25／E3.45）

本種目は、春先のワールドカップからメンバーおよび演技構成を変更して臨んだ。しかし、これまで課題としてきた演技後半のフレーズを最後までまとめきることができず、大きな課題が残る結果となった。

演技序盤では、1つ目のCRにおける受けの価値抜けや、クラブの交換において受けの価値を取りきれない場面が見られたものの、選手たちは冷静に対応しながら演技を進めることができていた。

しかし、3つ目の交換においてクラブの足蹴りが大きく逸れ、場外へ出たことをきっかけに演技が大きく乱れ始めた。事前に手具トラブル(場外)への対応方法を確認していたものの、一瞬の迷いから予備手具を取りに行く判断が遅れ、続く複数投げまでに手具を戻すことができず、不成立となった。さらに、フープの受け渡しにも対応しきれず落下が発生した。

続く交換では、クラブの予備手具を使用したことによる素材の違いを考慮し、手で投げる判断を行ったものの、その後のシリーズの連係において再び場外落下が発生した。最後まで演技のリズムを取り戻すことができず、不成立が続く形で演技を終える結果となった。

日本代表として、この時期の試合としては厳しい内容となったが、練習段階から安定感を欠いていた部分が試合の中で顕在化した結果でもある。演技内容や構成のみならず、トラブル発生時の判断や対応を含め、改めて課題を整理し改善に取り組む必要がある。

今回の経験を通して、技術的な課題だけでなく、予期せぬ状況に対する判断力や対応力の重要性も再認識することとなった。世界選手権まで残された期間は限られているが、一つひとつの課題と真摯に向き合いながら修正を重ね、どのような状況下でも安定した演技を発揮できるチームを目指していきたい。

課題は多岐にわたるが、その多くは日々の積み重ねによって改善できるものである。一つひとつの技を確実に実施できるよう、絶対的な練習量を確保するとともに、演技全体の完成度向上に努めていく。

出場メンバー

田口久乃、西本愛実、花村夏実、田中友菜、田邊観世埜